

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院学生研究
2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年 (学生番号: 19pb004h)		萱場千秋 印
指導教員	所属部局・職		氏名
	文学部		新田啓子 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	William Faulkner, <i>Go Down, Moses</i> における南部農園システムの分析		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在の ものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科英米文学専攻 博士後期課程1年		萱場千秋
研究期間	2019 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入 図・グラフ等は使用しないこと)

本研究は、William Faulkner の 1942 年の小説 *Go Down, Moses* を、史実を補助線としつつ分析することにより、作家の奴隷制度に対する経済的理解を詳らかにするものである。奴隷制は、1865 年まで米国に敷かれた社会的制度であり、人種主義に基づく経済システムである。南部作家である Faulkner は、南部農園を中心とした異人種間の金銭授受の表象によって、奴隷制時代、および、ポストベラム（南北戦争終戦）期における人種とジェンダーの不平等を物語化している。本研究では、同作最大の主題として書き込まれた奴隷制の「補償」という問題に着目することで、米国が今なお引き摺る人種問題の行方を見据えた Faulkner が創作において前景化した、黒人の経済的エイジェンシーの意義を考察した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

{ William Faulkner } { 経済構造 } { 奴隷制の補償 }

研究成果の概要 (図グラフ等使用しないこと)

本資金を得て遂行した研究では、① *Go Down, Moses* における南部農園の経済構造の整理、② Faulkner が描いた黒人キャラクターの経済的技量や生存戦略の分析をその主たる柱とし、同時に、自身の博士論文作成に向けた基礎を築くことを目標にした。よって本年度は、博論のマスターテキストとなる同作と派生する文学作品の精読、二次文献の調査および、米国に留学し、博士号を取得するための学問的基盤の構築に注力し、その成果を2件の口頭発表と1本の論文にまとめた。以下に、本研究の概要を3つの点から列記する。

(1) 黒人の経済的エイジェンシーの意義——継続された制度的暴力への抵抗

Go Down, Moses は、南部 McCaslin 農園にまつわる7つの物語——“Was,” “The Fire and the Hearth,” “Pantaloons in Black,” “The Old People,” “The Bear,” “Delta Autumn,” “Go Down, Moses”——から成る。Faulkner はこれらの物語を、奴隷制時代から1940年代までの、ある南部農園における家系の記録として描き出している。しかし物語の基盤となる“*The Bear*”に描かれるのは、農園主と奴隷女性の性関係という米国の歴史に刻印された普遍的なエピソードだ。農園主は650ドルで購入した奴隷女性に混血の娘を孕ませ、さらにその娘を犯して混血の男児を「再生産」する。奴隷女性だけでなく、自らの「父」から強姦される混血女性の表象は、子の身分は母のそれに従うという当時の米国の法的原則の欺瞞性を鋭く照らし出している。

さらに同作には、奴隷制度の「再生産」の余波として、ポストベラム期の人種とジェンダーの抑圧が描き出されている。“*The Fire and the Hearth*,” “*Delta Autumn*,” および “*Go Down, Moses*”には、McCaslin 農園の借地農の黒人家族、Beauchamp 家の人々が、その経済的抑圧に抵抗を表明しながら生きるさまが描かれているが、その過程で Faulkner は、Beauchamp 家の起源を浮き彫りにしていく。実は Beauchamp 家は、農園主を「父」に持つ混血男児が作ることを強いられた「黒人の McCaslin」であった。ちなみにこの一家は、正式な家系図には示されない。同作残りの3編においても、血縁関係にありながら不平等な交換行為を営む人々の姿が、南部の歴史的構図と呼応するように描かれている。異人種の「家系」の逸話を反復的に物語ることによって、同作は、農園主による一方的なセクシュアリティの収奪で成り立つ経済システムが米国に存在したこと、また、それに準ずる機構が再建期以降も機能し続けたことを明らかにしている。つまり Faulkner は、奴隷制が局所的で一過性の人種のマイノリティへの差別ではなく、米国経済の発展の裏面において、次世代の黒人の生をも侵害する「制度的レイシズム」だったことを看破し、テキストにそれを提示している。

とりわけその構図を読み取ることができるのが、1940年代を物語の現在時とする“*The Fire and the Hearth*”である。この物語には、黒人借地農として生きる Lucas Beauchamp による密造酒醸造や金貨探しのエピソードが描かれる。ここでは、老齢になってもなお、自身より20歳以上も若い白人家長、Roth Edmonds の生活を支えねばならぬ黒人借地農の地位が、「台帳」と「売店」を基軸とする農園の経済機構を通して明らかにされる。一方で、知性とウィットに富んだ Lucas のふるまいは、Roth の家長としての身分が形骸化していることを露見させる。密造酒醸造や金貨探しはビジネスとは言い難いが、行為者である Lucas が法制度や銀行取引を深く理解し、的確に運用しているという意味で、それらは「経済活動」としての様相を成している。しかし、Faulkner が Lucas のエピソードのうちに込めたのは、白人を経済的に負かすことによって、農園での労働で収奪された剰余価値を奪い返すだけの、いわゆる成金的な黒人像ではない。むしろ彼の「経済活動」で重視されるのは、白人による略奪の歴史を再演することである。作中、Lucas の妻の Molly が、Roth の「乳母」として、長期間、白人家庭で働かされたという彼の回想が挟まれている。物語の現在時の経済取引において、Lucas は農園の驃馬を無断で借り受けているが、それは、Molly の徴用を暗示する行為として解釈できる。つまり、Roth の驃馬を身勝手に借り受けた Lucas の経済的エイジェンシーは、黒人の使役で殖産を果たしてきた白人の論理を反復する。そのことは、しかし翻って、白人家長に対して奴隷制の歴史に「補償」を求めるだけではなく、それに付随する過去の搾取を「記憶せよ」という核心を伝えているのである。

(2) 経済的でない「補償」の可能性——奴隷制度をいかに解決するか

南部家系の年代記によって長期的な視座から奴隷制度を捉えた *Go Down, Moses* という小説には、米国の歴史的な罪に対する「補償」の問題が前景化されている。自らの混血の娘に性搾取を行った農園主は、死の床で、彼女に産ませた混血男児に1000ドルを与える旨を言い残す。言い換えれば、その「遺産」は、奴隷制下の黒人労働力の収奪によって築かれた農園の財の一部を、「再生産」の被害者の子孫に還元するという、いわば損害賠償金である。しかし Beauchamp 家の黒人は「遺産」を拒否し続けたため、1000ドルという金は、その利子で増幅しながら McCaslin 家の子孫に代々繰り延べられていく。つまり、白人による償いの金の供与、および、黒人によるその受領拒否というプロットは、資本主義によって一元化された賠償の方法が、

研究成果の概要 つづき

制度廃止後もその暴力が継続、ないしは膨張する米国の状況において、完全な「補償」として機能しえることではないということを示しており、そこに奴隷制の経済的原理を看破した Faulkner の卓見が表れている。

McCaslin 農園の奴隷主が考えたような経済的補償は、現在、民主党の大統領予備選挙に出馬している Bernie Sanders がそれを社会保障制度の一部として検討しているように、米国でその必要性が頻繁に問われている事案である。興味深いのは、Ta-Nehisi Coates と Glenn C. Loury のように、黒人知識人が、同じく黒人の被った歴史的損害を重んじたうえで、なおも経済的補償の擁護派と反対派に分かれているという状況である。奇しくもこの構図は、ポストベラム期の Beauchamp 家の人々を描く際、農園主の「遺産」に対する黒人の立場を繊細に書き分けている Faulkner の意匠を思い起こさせる。つまり奴隷制の「補償」の核心は、「経済的補償の可否」の二択にあるのではなく、目下苦境を強いられている黒人の生活を支えつつ、奴隷制の残滓である法制度や経済システムをいかに撤廃するかを、多角的に議論することにある。

Go Down, Moses に紡ぎ出される人種の不平等の解決の途、つまり新たな「補償」の可能性は、Lucas, Molly, そして Roth の関係性に提示されているように思われる。例えば、作中に描かれる Molly の老いた容姿は、彼女の長年の屋内労働における精神的、肉体的疲労を表している。Roth は、産褥死した実母の代わりに彼を育て上げた Molly を「唯一の母」として慕っているが、自身の誕生と成長が、彼女を「乳母」としての地位に貶め、その女性性を略奪してきた原因であることを認識している様子はない。その一方で、彼の視点は、実際より「はるかに高齢」な彼女の容姿をたびたび捉えている。Roth の視点に示されたある種の気づきは、Lucas の「経済活動」に代表される黒人のふるまいに誘発されるものである。つまり、Beauchamp 家の黒人のエイジェンシーが、ポストベラム期の南部で常態化していた「制度的レイシズム」を突き崩し、他者の痛みに無感覚であった Roth に、白人が黒人に負わせてきた重荷を認識させ始めたのである。

さらに、ここで重視すべきは、Roth が月に一度、煙草とキャンディを持って Molly のもとに通い、半時間ばかりの会話を彼女としているという猫写である。一見すると Roth から Molly への無邪気な愛着ゆえの行為であるように見えるが、南部プランテーションの主要農産物である煙草や砂糖を、農園で搾取を受けてきた黒人女性に届けるという行為は、彼女の老いた容姿と併置して描写されることで、図らずも、奴隷制の記憶を読者に呼び起こさせる。Faulkner がここに込めた政治的意味を読み込むとすれば、償いの品ともいえる手土産を携えて定期的に訪問してくる Roth に対して何の反応も示さない Molly は、赦しを与えることを延期しつつも、彼の「補償」の発展性を見守っているようである。これは、いまだ見ぬ、白人と黒人の相補的な奴隷制解決の一局面と捉えられる。他方で Lucas がこのような「補償」に対立的であるように思われるのは、金貨探しのエピソードの中に、彼が Molly へキャンディを渡すという猫写が挟まれているからだ。先に示した驟馬借用の論理を考えれば、それは、妻を取られた黒人男性の焦燥感が引き起こした、白人に対する対抗的な行為とみなすことができる。同時に、夫からキャンディを渡された Molly の反応は描かれていない。このため黒人の夫婦の間にも、搾取の制度に起因する深い溝があることが窺える。

このように、Lucas, Molly, そして Roth の間で交わされる金銭以外の交換行為からは、Faulkner が文学という虚構のうちにこそ示しえた「補償」の道筋を読み取ることができる。キャラクター間で思想の相違、あるいは、利害の競合が引き起こされているように、これが一元的な価値観で解決される問題ではないことを同作は強調している。だが、*Go Down, Moses* の7つの物語に多面的に描かれてきた異人種間の不平等な金銭授受のエピソードの応答となりうる、このような一進一退する三者のやり取りは、奴隷制の余波を生きる白人と黒人の——この場合、「再生産」によって形成された異人種の血族の——相克のうちに探られつつある、奴隷制の「補償」の可能性を示唆しているのではないだろうか。

(3) 「補償文学」——アメリカ文学史における新たなジャンルの形成

本年度の文学作品研究から、奴隷制という米国の歴史的汚点をいかに後処理していくかという問題意識が、とりわけ20世紀の米文学作品に多く見られることが確認できた。これを受け、そうした作品群を新たに「ジャンル」という視点から考究する課題を得た。それは、奴隷制の「補償」を主題とする20世紀米文学作品の体系化という目的を持つ研究である。方法論としては、*Go Down, Moses* を中心として、類比的・派生的な問題意識を持つ作家・作品を選出し、歴史的資料や作家の伝記的情報を補助線にしつつ、テキスト分析を行う。2カ年の計画において、1) テキスト分析、2) 史料調査による事実の整理、3) 償いの文学に関するジャンルの体系化の3段階を、作家の人種別、時代順に遂行していく。それにより、アメリカ文学史における人種研究の潮流の中に、「補償文学」という新たな切り口を提示したいと考えている。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多 場合主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。

- ①雑誌論文 (著者名、論文題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷物)

①雑誌論文

(1) 萱場千秋、「William Faulkner の *Go Down, Moses* における人種、性、補償」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』、第 21 号、2020 年 4 月発行予定。

②該当なし。

③該当なし。

④学会発表

(1) 日本アメリカ文学会第 58 回全国大会、2019 年 10 月 5 日、「無力な補償金——*Go Down, Moses* における南部農園システムの分析——」、於東北学院大学。

(2) 2019 年度立教英米文学会、2019 年 12 月 21 日、「*Go Down, Moses* における南部農園システムと黒人女性の労働」、於立教大学。